

千葉県香取市（国内2例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和6年10月23日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：採卵鶏育雛（約3.7万羽）

発生家きん舎の構造及び数：ウインドウレス鶏舎、4鶏舎（うち2鶏舎は発生時オールアウト済みで空舎、1鶏舎は改築中）

発生家きん舎の飼養形態：ケージ飼い（直立4段8列、通路5本）

2 施設の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は台地上に位置し、周囲をスギ・ヒノキ・広葉樹・タケの混在する樹林林に囲まれていた。また、谷戸が農場周囲を取り囲むように入っていた。谷戸は飼料用米と通常米の混在する水田となっていた。通常米水田は二番穂・落ち粃が認められたが飼料用米水田には落ち粃、二番穂はなかった。
- ② 調査時、農場周囲3kmには、いくつかの農業用水池があったが、水鳥類はみとめられなかった。農場から約10km離れた農業用ため池には、マガモ約2500羽、カルガモ約300羽、ヒドリガモ約50羽、オナガガモ約50羽、トモエガモ、ホシハジロなど合計約3000羽のカモ類が認められた。また農業用ため池周辺の水田にはコハクチョウが227羽認められ、また、二番穂が多数認められた。
- ③ 当該農場はウインドウレス鶏舎4棟からなり、発生時は発生鶏舎のみで採卵用育雛鶏が飼養されていた。その他の鶏舎については1鶏舎が改築中、2鶏舎がオールアウト済みであった。

3 通報までの経緯

- ① 農場によると、発生鶏舎（通報時60日齢）では、1週間当たりの死亡数が1～2羽程度のところ、10月15日に4つのケージで計8羽が死亡し、その後当該ケージに由来する鶏を中心に0～3羽/日の死亡が継続した。22日、2羽が死亡し、うち1羽で脚部の皮下出血及び浮腫が確認されたため、管理獣医師が衰弱個体1羽と併せ簡易検査を行ったところ陽性となり、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 現地調査時、死亡鶏が継続して認められていたケージに由来する個体には軽度の顔面浮腫、神経症状を伴う衰弱等の症状が認められたが、それ以外のケージの個体については活力旺盛であった。

4 管理人及び従業員

- ① 当該農場では、農場主の他、4名の従業員を雇用しており、また、ワクチン接種の際は、農場主の妻及びパート従業員も鶏舎に立入るとのこと。
- ② 飼養管理者は鶏舎ごとの担当分けをしていたが、休暇等の場合は担当外の飼養者が鶏舎に立入ることもあるとのこと。

5 施設の飼養衛生管理

- ① 車両が農場に出入りする際は、農場入口に設置された動力噴霧器で主にタイヤ周りの消毒を実施したのち、入口付近に駐車をしていた。
- ② 農場によると、農場主及び従業員は衛生管理区域に入場する際、衛生管理区域専用の靴に履き替え、各鶏舎専用の作業着に交換しているとのこと。また、外部からの入場者のうち飼料運搬業者については、衛生管理区域専用の長靴及び運転席フロアマットに替えていたが、他の外部入場者は靴の履き替え等を行っていないとのこと。なお、現在改築中の1号鶏舎の改築作業者については、車両のタイヤ周り消毒後、そのまま、1号鶏舎まで車両で向かい、改築作業を行っているとのこと。

- ③ 従業員が各鶏舎に入る際は、鶏舎入口の外に設置された消毒槽で衛生管理区域用の靴を消毒し、すのこを用いて鶏舎内に置かれている専用の長靴に履き替え、手指消毒を行い鶏舎に入場するとのこと。また、鶏舎入場後に別の鶏舎に入る場合のうち月齢が上の鶏舎から若齢の鶏舎に入る場合は、いったんシャワーを浴び、鶏舎専用の作業着に着替えてから入場しているとのこと。
- ④ 鶏舎内は主にトンネル換気が行われており、入口側の妻（クーリングパッドを設備）から逆の妻（ライトトラップの外側に排気ファンを設備）に向けて風が流れていた。この他に、鶏舎の屋根に5つの吸気口があり、屋根に付着した野鳥の糞等に由来する塵埃を吸収しないよう、屋根から3~40cm程度上の位置に吸気用の口が開いていた。吸気口内部には自動制御式のファンが設置されており、ある一定の温度以上になると回る仕組みとなっていた。また、側面には排気口が複数あり、亀甲型の約2cmの網目の金網が設置されていた。側面は、壁面上部と下部に吸気口があり、下部の吸気口では開閉用の蓋の外側に網目が約2cmの金網が設置されていた。
- ⑤ 飼料については、各鶏舎の横に飼料タンクが2台設置されており、閉鎖系のラインを通じて自動給餌を行っていた。
- ⑥ 飼養鶏への給与水は井戸水を利用しており、飲水ワクチンへの影響等を考慮し、塩素消毒は行われていなかったが、閉鎖系のラインで供給される構造になっていた。
- ⑦ 除糞ベルトは5日に1回稼働させており、直近は10月21日であった。除糞ベルトのピットへの落とし口には、複数枚の羽を持つ回転式の扉が設置されており、これが回転して下のベルトコンベアに糞が落ちる仕組みとなっていた。いずれかの羽が常に落とし口を塞ぐ構造となっているため、野生動物が侵入する可能性は無いと考えられた。
- ⑧ オールイン・オールアウトが行われており、オールアウト後は30日程度かけて鶏舎内の除糞と清掃・消毒を行い、その後の空舎期間を30~35日程度設けていたとのこと。
- ⑨ 直近の鶏の出荷は10月7日及び8日が最後だったとのこと。
- ⑩ 死亡鶏は毎朝の健康観察時に回収し、鶏舎外にある蓋つきバケツで保管し、堆肥の切返し作業を行う日に堆肥に混ぜ込んでいた。また、最上段のケージについては、約2m程度の高さにあったが、はしご等を用いた観察は3日に1日程度実施していた。
- ⑪ 他農場との重機の共用は行われていなかった。

6 野鳥・野生動物対策

- ① 農場内では野生動物はほとんど見かけず、野鳥ではカラスをまれに見かけるとのこと。現地調査時には野鳥や野生動物は認められなかった。
- ② 鶏舎内ではネズミを見かけることはないが、ペストコントロール業者と契約し殺鼠剤を設置しているとのこと。また、除糞を高頻度に行っているため、夏季は多少糞に蛆がわくものの、鶏舎内でハエを見るのはまれとのこと。現地調査時には、ネズミ、ラットサイン、ハエは確認されなかった。

(以上)